

平成27度宮城県議会
地方創生調査特別委員会 広島大学視察

グループ2

宮城県議会議員（地方創生調査特別委員会）
広島大学連携市町、広島大学生
ワークショップ議事録

地方創生において、大学に何を期待するか
－農水産業と農山漁村の場合－

27年5月27日（水）13:15～ 広島大学生物生産学部第1会議室

平成27度宮城県議会 地方創生調査特別委員会 広島大学視察 出席者 名簿

取扱注意

区	分	職 名	氏 名	備 考
安 芸 太 田 町	地域づくり課	課 長	栗 栖 一 正 (くるす かずまさ)	
	地域づくり課	主 査	矢 立 純 (やたて じゆん)	
	地域おこし協力隊	地域おこし協力隊	渡 辺 良 平 (わたなべ りょうへい)	
	地域おこし協力隊	博士課程後期	大 坪 史 人 (おおつぼ ふみと)	
大 崎 上 島 町	産業観光課	課 長	森 下 隆 典 (もりした たかのり)	
世 羅 町	産業振興課	主 査	和 泉 美 智 子 (いずみ みちこ)	
中 国 新 聞	東広島総局	記 者	新 本 恭 子 (しんもと きょうこ)	
株 式 会 社 サ タ ケ	経 営 本 部	秘書室長兼 新規事業推進 室長 ・博士課程後期 中国営業推進 課長	佐 々 木 智 (ささき さとし)	
	ア ジ ア 事 業 部	・博士課程前期	松 本 吉 人 (まつもと よしと)	
宮 城 県 議 会 地 方 創 生 調 査 特 別 委 員 会		委 員 長	長 谷 川 敦 (はせがわ あつし)	
		副 委 員 長	堀 内 周 光 (ほりうち のりみつ)	
		委 員	伊 藤 和 博 (いとう かずひろ)	
		委 員	す だ う 哲 (すどう さとし)	
		委 員	只 野 九 十 九 (ただの つくも)	
		委 員	池 田 憲 彦 (いけだ のりひこ)	
		委 員	相 沢 光 哉 (あいざわ みつや)	
		委員(職務代 行者)	今 野 隆 吉 (こんの たかよし)	
	宮 城 県 議 会 事 務 局	震 災 復 興 ・ 企 画 部	次 長	高 橋 彰 (たかはし あきら)
議 会 事 務 局		書記(政務調 査課)	久 保 美 幸 (くぼ みゆき)	
		書記(議事 課)	大 友 幸 二 (おおとも こうじ)	

区	分	職 名	氏 名	備 考
広 島 大 学	大学院生物圏 科学研究科	研 究 科 長	植 松 一 真 (うえまつ かずまさ)	
		研究科長補佐 教 授	河 合 幸 一 郎 (かわい こういちろう)	
		教 授	山 尾 政 博 (やまお まさひろ)	
		准 教 授	細 野 賢 治 (ほその けんじ)	
		特 任 助 教	天 野 通 子 (あまの みちこ)	
		副 理 事	石 川 幸 秀 (いしかわ ゆきひで)	
	大学院生物圏 科学研究科	支 援 室 長	善 村 浩 之 (よしむら ひろゆき)	
		支援室副室長	和 田 芳 弘 (わだ よしひろ)	
		コーディネータ	大 泉 賢 吾 (おおいずみ けんご)	
		博士課程後期	加 藤 愛 (かとう あい)	
		博士課程後期	細 川 富 美 子 (ほそかわ ふみこ)	
		博士課程前期	曾 我 部 知 史 (そかべ ともちか)	
		博士課程前期	三 木 香 織 (みき かおり)	
		博士課程前期	高 橋 穂 (たかはし みのり)	
		博士課程前期	三 谷 友 紀 (みたに ゆき)	
		博士課程前期	萩 原 友 圭 子 (はぎわら ゆかこ)	
	生物生産学部	博 士 課 程 前 期	西 元 信 人 (にしもと のぶと)	
		学 部 生	黒 木 大 揮 (くろき だいき)	
		学 部 生	林 雄 大 (はやし ゆうだい)	

宮城県議会来訪の目的

県 議

- 政令指定都市仙台市への人口集中により、地方の活性化が課題。同じく広島市をもつ広島県の地域に根差したプログラムについて知りたい
- 人口減少→産業の低下→財政逼迫→行政サービスの低下→人口の流失 交流人口の視点からの人口減少の打開策を求める
- これまでの大学との関わり： 関西の大学が、地域おこし協力隊を通し交流をもった(登米市米川プロジェクト)。 広島大学の日比野教授(工学)がガレキの利用法を考案

地域が大学との連携に関心を抱くのは？

<広島大学連携市町>

大崎上島町

合併後人口は1万人から8千人へ。高齢化率47%。完全離島。観光交流するにはめぼしい観光資源がない。まず島に来てもらう。小さい交流を積み重ねることで、定住の種をまく。広島大学との交流はその導入部分。

安芸太田町

人口6700人、県内最少人口の町。「(大学生との)つながりの強化」により、長期スパンで、中山間地域で活躍する人材が育つことを願っている。

[井仁地区]地区人口58人、大学の取り組みを歓迎、「地域が大学に提供できるポテンシャル」を探している。日にちがかかることと認識、5～10年スパンでの影響に期待している。

地域に行った学生の感想

学 生

- 世羅町の「せらマルシェ」で地元の高校生と交流。「せらの日本一」を探す。地域への愛着、自分の町を好きになることはよいことだと思った。
- 条件不利性は知っていたが、体験したのは初めて。地域体験を通し、興味のなかった人が興味を持つようになる。体験してみて、農家の大変さが初めてわかった。
- 学生の地域体験は社会連携の窓口。地域は大学が何をしているかがわからない。地域の人が大学に何をかしてほしいときの窓口になる。

学生を受け入れた地域が感じたこと

地 域

- 学生の体験活動を通し、自由に地域に入れるような「切符」を渡せる。草の根で、「～さん」と呼ばれる関係づくりができる。
- 住んでいる人がその地を好きになってくれることが大事。そのための住民活動の仕掛けづくりをするのに、大学生がアイデアを提供してほしい。

企 業

- 田舎に行ったことのない人が田舎へ行くきっかけになるのはよいこと。自由に地域に入れる環境作りが必要。草の根で地域の人と話してほしい。一次効果に続く、波及効果が必要。

県議が感じる宮城県の状況

県 議

- 山村離島を担当し、ハードな部分でテコ入れしたが人口減少が止まらず、小中学校がなくなり流出は加速。漁業・農業を振興させ、第1次産業従事者の魅力を訴えることが大切。地元の人たち、役場の協力が必要。
- 本県では、T大学との連携はない。M大学に地域連携学部があり、地方の課題の解決を図ろうとしているが、農林水産系での連携はない。
- 地方の空き家、シャッター通りの問題と対策とを絡めていくことも重要。尾道市訪問では、東京からIターンする人たちが空き家に定住している事例を聞いた。

外部者を受け入れた地域が感じること

地 域

- I/Uターンが増え、数年で100人くらいが転入。農業志望者は、農業経験がなくてリタイアするケースも。半年～1年ペースでの行政のチェックが必要。
- 広島大学出身者、広島県出身者より、他地域の人が多い。広島大学は種まきをしてくれていると認識。
- 受け入れる市町として、(地域に来た学生が)長くつながり、社会人になってもサポーターとしての役割を果たしてくれることを望む。
- 田舎のごく小さい集落(21世帯54人)は学生を受け入れるだけで大きな負担だが、体制の仕組みづくりのきっかけには良い。閉鎖性を開放し、地域の体制づくりを少しずつやっていく必要がある。

大学が地域と連携する際の課題

教員

- 学部の学生は4年ごとに入れ替わるので、翌年以降の引き継ぎが不確定。研究室レベルを超えた次世代への継承システム作りが必要であることを踏まえ、今の地(知)の拠点整備事業を行っている。
- 地域が若者・Iターン者を受け入れる際、地域の人たちの自己出資を抑えるための、県市町の独自の取り組みがあれば大学も関わりやすい。
 - 学生を受け入れる受け皿が組織としてできている
 - 学生が地域で活動することにかかる費用負担を大学と地域でコストシェアリングしやすい

地域と大学の連携のとり方、継続性

地 域

- 大学に直接何をどう頼めば良いかわからない。地域の中、役場の中に、サテライト(情報窓口)がほしい。
- 大学と地域両方を知る、窓口になる総合案内所職員が欲しいが、任期3年では短かすぎて困る。
- (学生は地域との)つながりを長く持ち続けてほしい。学生自身が運営する地域のサポート団体があり、学生のネットワークで人が地域に来るシステムがあればよい。
- 学生が、先輩がしてきたことを引き継ぐような中でやるのがよいと思う。

地方創生につなげる地域・大学連携のしかたとは

- 地域の活性化のきっかけとして、大学との連携が導入になる
- 学生が大学のある地域を知り、一次産業を知ることが、将来作りになる。体制を作り、定住へとつなげていく。
- 大学の活動は、学部横縦、継続性が重要。やがて補助金がなくなっても継続できる長期視点で。産学官の連携が大事。
- 地域と大学との付き合いは、双方が考え方の相違や目指す方向性などを認め合えば協力関係ができる
- 施策ごとに成果指標が必要。頑張っている地域を明確にし、戦略的にその地域との連携を強化。
- 地域が持っている有効性のある施策を生かすべき。
- 学生の意識が高まっているうちに、県内の地域ネットワーク、県内大学のネットワークをつくる
→ネットワークづくりには県が音頭をとっていく必要がある